



東日本大震災から 15 年 その時、現場では……



森 剛

1. 大地震発生

2011 年 3 月 11 日(金)14 時 46 分、宮城県牡鹿半島沖を震源とする日本を壊滅的な状況に追い込む大地震が発生した。その時、筆者は帝京大学医学部附属病院に勤務しており、部内の職員通路で当時の技師長と立ち話をしていた。リニューアルオープンしてまだ 2 年の新棟は免震構造であったが、突然大きな揺れに見舞われた。上司から「撮影室を見て来い!」と指示され職員通路を走って向かったが、狭い通路であったため右の壁にぶつかり左の棚にぶつかりジグザクに駆け抜けた。幸いにも検査中や廊下で待っている患者にケガ等の被害はなかった。当日は転倒や落下物等による外傷患者の急増を想定し、技師長の指示によって急遽当直(明けなし)を行うことになった。都内では電話が繋がらず、電車は全線運休となり、主幹道路は帰宅者によって埋め尽くされ、沿線のコンビニ等には飲料水を含む食料品がすべて無くなった。

翌 12 日(土)15 時 36 分 福島第一原子力発電所(以下、福島第一原発)の 1 号機で水素爆発。福島第一原発から東京までは約 250 km 離れていることから、放射線は無視できるレベルに減弱するが、放出された放射性核種のガスや粉じんが風に乗って拡散される。そのため東京では連日マスメディアで大々的に報道されていた。

2. スクリーニング要請

週明け、文部科学省災害対策室医療班から緊急被ばくスクリーニングの要請が病院へあり、院長から技師長への通達を経て、筆者と当時 30 歳前半の若手が呼び出された。そこでは 2 人で福島へスクリーニングに行くよう命を受けた。その夜、うちに帰りその旨を家族に伝え、2 日後には長女の中学校の卒業式を控えており、長女からは「何でパパが行

かなくてはならないの?」「何で卒業式に来てくれないの?」「この裏切り者!」と涙で訴えられた。最後の言葉は未だに耳に残っている。卒業式当日は式典後に長女は号泣していたと妻に聞き、激しく胸を衝かれた。

15 日(火)院内の屋上で計測している放射線量がいきなり跳ね上がった。東京の空間線量率は通常であれば $0.03 \sim 0.05 \mu\text{Sv/h}$ 程度であるが、その日の東京都健康安全研究センター(新宿区百人町)の空間線量率は $0.8 \mu\text{Sv/h}$ まで達した。

3. いざ福島へ

16 日(水)長女の卒業式当日、娘に会わないよう準備を進め出勤し、午後になって「緊急支援車」のカードが発行されたので業務終了後に病院の公用車(プリウス)で出発となった。出発前に念のためにとルゴール内服液が処方され内服したが、これが吐き気を催すほど不味かった。出発には技師長をはじめ、院長副院長ら大勢の病院幹部に見送られ病院を後にした。東北自動車道に入って福島を目指す、東北道は全く車が走っていない。時折、パトカーや他の緊急支援車両が走行しているだけである。途中、SA に立ち寄ってフードコートで夕飯を摂った。SA 内での客は制服姿の自衛隊らの他には私服の筆者らだけであった。食事を終えてフードコートを出ようとすると、厨房内にいたスタッフら数人が出口のところで両サイドに並び「頑張ってください!」「東北を救ってください!」と普段着姿の筆者らに頭を下げてくれた。その瞬間、筆者らの胸には込み上げてくる熱い想いが去来していた。駐車場には「この先、SA のレストラン等で食事の提供は行っておりません」の文字が、「いよいよ立ち入るんだ」と否が応にも緊張感を高めてくれた。

22 時前、福島市に入り予定していた福島駅前の

ホテルにチェックイン。ホテルは傾いているためエレベーターは使えず、客室の9階まで外階段で歩いて上がるしかない。3月中旬の福島なので外階段もところどころ凍っていて、手すりをしっかり握り恐る恐る歩を進めて行った。客室では電気は通っていたが、水が全く出ない。そのためトイレに行くにも先ほど言うこの体で上がって来た外階段を降り、中庭に設置された仮設トイレに行くしかない。そのトイレの扉を開けると幾人もの排泄物が幾重にも折り重なって堆積している。しかも水が出ないため、手洗いの水は近くの池からくみ上げてきた水がバケツに入って設置されているのだが、そのバケツの水も凍っていて手を水に浸けることすらかなわなかった。いつまた大きな揺れがあるか分からないため、ジーンズにパーカーのまま室内灯も付けたまま就寝した。ちなみにこのホテルはこの日で営業を終了し、建物の取り壊しとなった。

4. サーベイ開始

翌朝、宿泊ホテルからほど近い福島県庁隣の自治会館へ向かった。この自治会館4階に今回の原発事故による被ばく災害対策本部（以下、対策本部）が設けられていた。ちなみに3階では東京電力の記者会見が頻繁に行われており、非常に多くの報道陣が3階フロアからあふれ出すように詰めかけていた。対策本部へ入ると、他施設からのチームはすべてDMATお揃いのユニフォームパンツとジャケット＆ベンチコートを手織り、セーフティブーツを装着しているが、筆者ら2人だけはパーカーにジーンズ、スニーカーという出で立ちで完全に浮いていた。この対策本部がスクリーニング支援に来ていたチームを日ごとに振り分け、住民の方が避難している所へ行きサーベイを行うことが任務であった（図1, 2）。対策本部での決め事として、

- ・空間線量率が20 $\mu\text{Sv/h}$ を超えたら対策本部へ連絡する。



図1 対策本部内

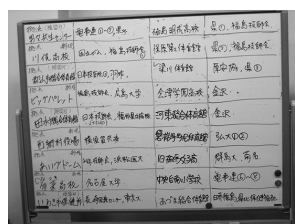


図2 チームの振り分け

- ・サーベイの基準として10万 cpm を超えたら除染する。ただし、1万3000～10万 cpm は自分で除染してもらう。

- ・作業は必ずタイベックスを着用する。

- ・個人線量計で100 μSv を超えたら退避する。

であった。ちなみにIAEAで勧告されている皮膚や衣類が汚染した場合に除染しなければならないレベルは1万 Bq/cm²であり、これを1分当たりの放射線計数率に換算すると240万 cpm となる。更に10万 cpm のヨウ素の皮膚への組織線量当量率は170 $\mu\text{Sv/h}$ である。

筆者らは滞在している間、相馬市、いわき市、福島市でサーベイ活動を行った。相馬市では福島第一原発から30 km の場所にあり、数年前に廃校となった旧相馬女子高校でサーベイを行った。発電所から10 km の南相馬市から避難して来られた方がたが詰めかけているところであった。ここでも他チームはサーベイしている教室へ案内されたが、普段着姿の筆者らは避難者と間違われ「もう既にいっぱいだから他の所へ行ってくれ」と追い払われそうになった。やはりこのようなときはチームジャケット等が必要だと痛感した。この時の旧相馬女子高校での室内空間線量率は0.3 $\mu\text{Sv/h}$ 、屋外空間線量率は1.3 $\mu\text{Sv/h}$ であった。ちなみに福島第一原発境界でのモニタリングでは前日の空間線量率が10 mSv/h、当日は330 $\mu\text{Sv/h}$ であった。校舎内の各教室をはじめ廊下にも隙間がないほど避難者が段ボールを敷いて数10 cm の壁を作り、丹前を羽織って毛布等で包まって寒さを凌いでいた。昼の休憩は校舎隣にある体育館の出入り口近くに駐車した車中で、食事は病院から供給されたドライフーズと缶詰のパンであった。ドライフーズはお湯がないのでポリポリかじるしかなかった。そして体育館は死体安置所となり、ひっそりなしに警察車両が横付けされ、目の前でご遺体運び込んでいた。体育館から出てくる方は泣き崩れて、家族らに支えられようやく立っていられるという方が幾人もいて、とても居たたまれないお昼であった。

いわき市ではいわき保健所で、長崎医療センターのチームと一緒にサーベイを行った。いわき保健所は対策本部から100 km 以上離れている。常磐道をプリウスで飛ばして行くが、常磐道は道が凸凹しており何度も車が突然バウンドし、なかなかスリリングなドライブであった。車線ラインが辻斬りにあっ

たようにズレていたり、道に大きなひび割れが発生していた。サーベイしていると家で飼っている犬や猫もサーベイして欲しいと、ペットを連れてくる方もいた。そして畑で採れたハウレン草や大根も食して問題ないかサーベイを希望された。いわき保健所には東京の練馬駐屯所から自衛隊が駆けつけてきており、簡易式の除染施設を設置してあった。中を見せてもらったが、テントが3張りあり、最初のテントは放射線の高い衣類を脱ぐ脱衣所、真ん中のテントがシャワー室、最後のテントで汚染されていない衣類に着替えるようになっていた（図3）。お昼の休憩は保健所職員が「何にもないですが……」と言われ、カップ麺を出してくれた。被災地では食糧難であることがマスメディアで繰り返し報道されていたので何度もお断りしたが、「お礼はこれくらいしかできない」と言われ、結局誘惑に負けてしまった筆者らであった。この時のカップ麺はこれまで食してきた即席めんの中で最高の味であった。

福島市は福島西高校でのサーベイであった。対策本部から直線距離にして1.5 kmほどの所に位置している。この場所での室内空間線量率は $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 、屋外空間線量率は $5.0 \mu\text{Sv/h}$ であった。筆者らは地域住民がサーベイに来られるということで、寒風吹きすさぶ校舎の玄関口での任務を行った。サーベイを行っているとき校長先生がダルマ型の石油ストーブを持ってきてくれた。当時の福島ではガソリンや灯油が不足していてガソリンスタンドに数100 mにも及ぶ渋滞を作っていた。校長先生には「我ら二人だけのために貴重な燃料を使うことはできない」と断ったが、「せめてものお礼です」と言って置いて行ってくれた。しかし、こればかりはご厚意に甘えるわけにもいかず、校長先生が立ち去った後はストーブの火を落とさせてもらった。筆者らが行った

被災地は、自宅はあるが放射線による退避命令で自宅に近づけない方、自宅が津波で流されてしまったため帰る家がない方等様々であった。着ている上着が汚染されていて高い線量値を示している人も多く、それでも着のみ着のまま逃げて来たため替えの服もなく、寒さのために防寒用の上着を脱ぎ捨てるわけにもいかず着続けなければならない方も少なかつた。ちなみに、ここで最も高い値は着ていたセーターから16000 cpmを示した。しかし検査を行った福島の方がたは皆、悲壮感を見せず、筆者らに『遠くからわざわざ来て下さったの？気を付けて作業してね。事故のないように家まで帰ってよ』と逆に心配してくれて、被災者からの思いやりに胸が熱くなった。後日帰京後、福島西高校の校長先生にストーブ等のお礼を込めてメールをすると、「これから、どのような展開になるか想像が付きませんが、はっきりとしていることは、皆で力を合わせていかなければならないということです。福島県教育界もピンチです。それでも、春は確実に近づいて、花壇の蕾も、木々の花や芽も膨らんでいるのです」と返信があった。

福島でのサーベイは4日間であったが、サーベイをしていて感じたことは、当時の菅政権や県への不信感からサーベイ結果を「問題ありません」「大丈夫ですよ」と言ってもなかなか信じてくれない方が散見された。測定した数値を伝えても一般の方にはそれが高いのか低いのかも判別がつかない。それで苦肉の策として医療における放射線検査と比較して、「この数値なら問題ない」という説明でようやく納得してくれた方もいた。TVでは放射線専門の解説者が「医療の放射線検査による被ばくの線量と今回の放射能汚染による被ばくの線量を比較しないで欲しい。我々の数十年の研究が無駄になってしま



図3 自衛隊設営の除染テント（左：全体，中：汚染服の脱衣所，右：シャワー室）

う」と訴えていたが、現地の被災者は研究者の理論よりも自分や家族の健康が最優先であり、それには一般の方に安心してもらえるための分かりやすい比較も必要ではないかと感じた記憶が残っている。

5. 任務を終えて

任務を終え、東北自動車道で帰京している最中にSAに寄ったが、トイレで自衛隊員の集団と遭遇した。自衛隊員は靴や制服のみならず手や顔等も泥だらけであった。トイレ後に手を洗っていて「久しぶりに手が洗える。ありがたい」と同僚と話し合っていた言葉が強く印象に残っている。また、消防隊員が話しているのも耳にしたが、鹿児島からはるばる陸路で東北まで来た消防員のようにであった。出動命令が出て何十時間もかかって肉体的にも大変だったと思うが、TVのキャスターが「来るのが(対応が)遅い」とコメントしていた。「自分たちは座ってコメントを出しているだけで、現場では肉体的にもきつい思いをして動いているのに、そのようなコメントはやる気が失せてしまうだろうな」と思った次第である。

6. 最後に

震災から3か月ほど経ち町の木々も深緑となった頃、PTA活動として南三陸町へ物資を届けに行ったことも追記させてほしい。当時、筆者の子は板橋区立の小学校に通っていた。板橋区には50数校の小学校があり、各校のPTA会長から組織されている小学校PTA連合会（以下、小P連）なるものがある。その時、筆者は小P連の副会長を務めさせてもらっていて、震災直後に各校を通じて支援物資を募った。膨大な物資が届いたが、被災地に本当に必要な物を選択し、3tトラック2台で南三陸町の伊里前小学校へ物資を届けに行った。南三陸町は海に面した町で、伊里前小学校は海岸から300mほどのところで小高い丘に位置している。

南三陸町に到着すると、町の壊滅状態に目を疑い同行した者すべてが言葉を失った。道中、町民へ避難を呼び掛け続け、結果、津波の犠牲となった遠藤未希さんが最後までいた南三陸町の防災対策庁舎に立ち寄った（図4）。彼女の無念を思うと、胸が締め付けられる思いであった。全身の毛が逆立つようで、恥ずかしながら筆者も頬を伝う涙に抗う術を知らなかった。筆者がもし同じ状況であったなら、彼

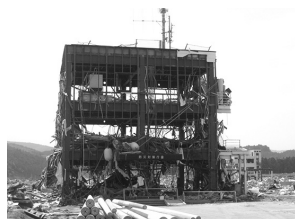


図4 防災対策庁舎



図5 スタンドの看板

女らと同じようなことができたであろうか？

木枯らしに耐えていた凛々しい山々は燃ゆるような緑に囲まれているが、町は3月11日のまま止まっており、そこはもう人工的構造物がすべて打ち崩された、幼少の頃に見た怪獣に建物すべてを破壊されたジオラマさながらな光景。ただただ「うわあ〜」という言葉しか出てこない。特に子どもたちが逃げ惑っている情景を思い浮かべると、「本当に怖かったんだろうな、苦しかったんだろうな」と、胸が痛くなってしまった。

海辺の町まで来ると、言葉で表現できないような惨状を呈している。それにしてもこれだけの瓦礫と化した町で、町の人々の移動、支援物資の流入等ができるように短期間で道路が整備されたのは、自衛隊や国土交通省の方がたの献身的な活動によるものだと思う。町ではおよそ1万人が犠牲となり、7割の住居が流されてしまって、水産業が盛んなこの町では、地震、津波の被害に加えて、活気ある職場まで奪われてしまっている。家が流されてすべてを失い体育館等で避難生活を余儀なくされていた人たちが、仮設住宅に入居が決まると、その時点で食事等の支給がなくなってしまう。すべてを失っているのだから自分で物資を調達できるはずもなく、また買い出しに行くにも1番近いスーパーまで30km以上もある。車も失ったのだから、とても買いに行ける距離ではない。そのため、仮設住居への入居を拒む方もいて、避難所生活を続けざるを得ない方がたも多くいたようだった。

最後に帰路に着く時、被災地の入口とでもいえる場所でガソリンスタンドが営業していた。そこにはボードに大きな字で「津波のバカ! でもがんばっぺ!!」と書かれてあった（図5）。まさに町民の気持ちを表した端的な言葉で、とても強く心に残っている。

（社会医療法人財団大和会 武蔵村山病院 放射線室）